シカの生息状況が 哺乳類相に与える影響調査 (7年目)

シカの生息状況が哺乳類相に与える影響調査〔7年目〕

調査者 姉崎 智子

1 調査の目的

群馬県内においてはニホンジカ (Cervus nippon) の生息分布が拡大傾向にあり、植物の衰退が著しくなってきている。森林や下層植生の衰退はニホンジカ以外の大型哺乳動物にも影響を及ぼすことが予測され (例えば幸田ほか 2014, 古澤 2015等)、継続的なモニタリング調査が必要である。

このため、県内における哺乳類の生息状況把握の充実化を図るとともに、生息状況の変化を把握することを目的として、定点を決め長期的なモニタリング調査を継続している。

2 調查対象地域

2024年度は、2023年度に引き続き藤原地区、玉原高原、稲含山、みかぼ森林公園の4カ所において調査を実施した。稲含山はシカの密度がすでに高い場所であり、玉原高原は過去数年の間にシカの侵入が確認され、藤原はシカが侵入しつつあった場所、みかぼ森林公園は過去7年間に森林公園全体のササが矮小化する等、シカによる採食圧が高まっており、その範囲が周辺に拡大中の地域である。また、2024年度は、新規調査地点として赤城山覚満淵周辺を設定し、2024年8月25日にカメラ8台を設置した。

3 調査方法

カメラトラップ法を用いて調査を行った。使用したのは、自動撮影カメラTrophy Cam (Bushnell社製)である。センサー有効距離は約18m、反応角度は約10°、撮影範囲角度は50°である。撮影後1分間の休止時間を設定し、同一個体の連続撮影の防止に努めた。画像には、撮影日と時刻(時、分)が記録される。赤外線センサーが太陽光に反応することを防ぐため、可能な限り直射日光の当たらない樹冠下にカメラを設置した。カメラは地上高約1.2m前後で立木の樹幹にインシュロックで固定し、レンズの向きはやや下向きに設定した。カメラの設置日からカメラ交換時の撮影終了日時を記録し、カメラ回収までにバッテリーが終了している場合は、最後の写真が撮影された時点を最終撮影日時とした。

撮影されたデータをもとに、種を同定し、集計した。撮影された動物の多くは個体識別が困難であった。同一個体の重複カウントの影響を最小にするために、動物の撮影頻度を30分以上はなれたイベントに限って種ごとに集計し、同一種が30分以内に複数枚撮影されても1枚として扱った(島田 2010)。1枚の画像に複数頭の動物が撮影された場合は、撮影された頭数を撮影回数としてカウントした。これらのデータをもとに撮影頻度指標(RAI: relative abundance index・100カメラ日あたりの頻度)を算出した。

4 調査結果

調査開始日から最終交換日までのカメラ設置状況、稼働日数、撮影枚数、RAIは表1~5に示したとおりである。

藤原地区は、2019年度から2020年度にかけてシカの占める割合が減少し、クマの撮影頻度が増加した(図1)。2021年度から2022年度にかけて、シカの占める割合は若干増加した。カモシカの

撮影頻度は2020年度から2021年度にかけて増加し、2022年度に若干減少した。クマの撮影頻度は2020年度から2021年度にかけ著しく減少し、横ばいとなっている。2023年度はネズミの撮影頻度が著しく増加したが、2024年度上期は減少する一方、シカの撮影頻度が増加した。

玉原地域は、2021年度、2022年度にはシカの撮影頻度が若干減少したが(図2)、2023年度には増加に転じ、2024年度上期も増加した。

稲含山については、2023年度、シカの撮影頻度に若干の減少が認められたが、2024年度には 2022年度とほぼ同等の撮影頻度に増加した。小動物については、タヌキ、キツネ、アナグマ等に 加えて、2023年度よりリスが撮影されるようになった (図3)。

みかぼ森林公園は、シカの撮影頻度が最も多く、2022年度から2024年度上期にかけて増加傾向にあることが確認された(図4)。

赤城山覚満淵周辺では、シカの撮影頻度が最も高く、覚満淵周辺に設置された保護ネット内で91.7%を占めた。その他、保護ネット内で撮影された動物は、クマ、キツネ、タヌキ、アナグマであった(図5)。

表1 藤原地区における自動撮影カメラの設置日数、稼働日数、撮影日数、動物撮影回数

設置期間	設置日数	稼働日数	稼働率	撮影枚数	動物撮影 枚数	動物 撮影率	RAI計
20231110-20240517	189	24	13%	12	1	8%	4.17
20231110-20240517	189	189	100%	2965	5	0%	2.12
20231110-20240517	189	189	100%	299	14	5%	6.88
20231110-20240517	189	189	100%	936	25	3%	11.11
20240517-20241120	188	188	100%	128	68	53%	28.72
20240517 - 20241120	188	188	100%	942	12	1 %	5.85
20240517 - 20241120	188	188	100%	38	24	63%	10.64
20240517 - 20241120	188	188	100%	106	46	43%	16.49
20240517 - 20241120	188	188	100%	106	46	43%	16.49

表2 稲含山における自動撮影カメラの設置日数、稼働日数、撮影日数、動物撮影回数

設置期間	設置日数	稼働日数	稼働率	撮影枚数	動物撮影 枚数	動物 撮影率	RAI計
20230603-20231221	201	201	100%	195	140	72%	61.19
20230603-20231221	201	201	100%	245	164	67%	69.15
20230603-20231221	201	201	100%	259	122	47%	51.24
20230603-20231221	201	201	100%	129	107	83%	41.79
20230603-20231221	201	201	100%	14	11	79%	3.98
$20230603\!-\!20231221$	201	4	2%	4108	0	0%	_
20231221-20250108	384	384	100%	163	53	33%	8.85
20231221 - 20250108	384	384	100%	441	128	29%	26.30
20231221 - 20250108	384	86	22%	961	2	0%	2.33
20231221 - 20250108	384	307	80%	127	108	85%	29.97
20231221 - 20250108	384	217	57%	22	15	68%	12.90

表3 玉原地区における自動撮影カメラの設置日数、稼働日数、撮影日数、動物撮影回数

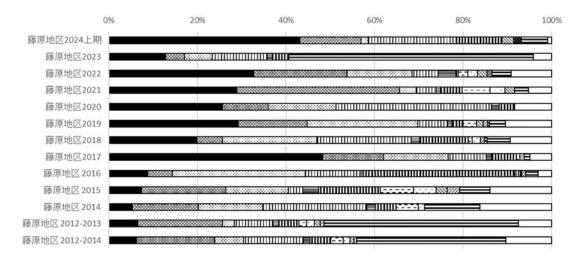
設置期間	設置日数	稼働日数	稼働率	撮影枚数	動物撮影 枚数	動物 撮影率	RAI計
20231119-20240518	181	181	100%	342	21	6%	6.63
20231119-20240518	181	181	100%	286	147	51%	4.97
20231119-20240518	181	181	100%	1785	37	2%	2.21
20231119-20240518	181	181	100%	315	29	9%	3.87
20231119-20240518	181	181	100%	174	16	9%	2.76
20231119-20240518	181	181	100%	454	49	11%	9.39
20231119-20240518	181	181	100%	2096	13	1 %	3.31
20231119-20240518	181	181	100%	2835	17	1 %	6.63
20231119-20240518	181	4	2%	2605	7	0%	25.00
20231119-20240518	181	181	100%	845	7	1 %	2.21
20231119-20240518	181	181	100%	62	2	3%	1.10
20231119-20240518	181	181	100%	73	30	41%	1.66
20240518-20241123	190	190	100%	360	13	4%	5.26
20240518-20241123	190	190	100%	2951	480	16%	3.16
20240518-20241123	190	190	100%	330	90	27%	26.32
20240518-20241123	190	190	100%	71	44	62%	17.89
20240518-20241123	190	190	100%	240	34	14%	13.68
20240518-20241123	190	190	100%	23	9	39%	4.21
20240518-20241123	190	190	100%	14	4	29%	2.11
20240518-20241123	190	190	100%	125	59	47%	5.26
20240518-20241123	190	190	100%	147	86	59%	0.53
20240518-20241123	190	190	100%	254	195	77%	22.63
20240518-20241123	190	190	100%	368	112	30%	8.42

表4 みかぼ森林公園における自動撮影カメラの設置日数、稼働日数、撮影日数、動物撮影回数

設置期間	設置日数	稼働日数	稼働率	撮影枚数	動物撮影 枚数	動物 撮影率	RAI計
20231108-20240523	197	197	100%	16	12	75%	0.05
20231108-20240523	197	197	100%	7	3	43%	0.01
20231108-20240523	197	197	100%	1577	50	3%	0.15
20231108-20240523	197	197	100%	25	18	72%	0.08
20231108-20240523	197	197	100%	23	19	83%	0.09
20231108-20240523	197	197	100%	13	9	69%	0.05
20231108-20240523	197	197	100%	413	22	5%	0.07
20240523-20241114	176	144	82%	64	36	56%	0.25
20240523-20241114	176	151	86%	26	19	73%	0.13
20240523-20241114	176	176	100%	386	159	41%	0.68
20240523-20241114	176	30	17%	22	15	68%	0.37
20240523-20241114	176	176	100%	41	37	90%	0.18
20240523-20241114	176	176	100%	20	17	85%	0.10
20240523-20241114	176	176	100%	76	36	47%	0.15

表5 赤城山覚満淵周辺における自動撮影カメラの設置日数、稼働日数、撮影日数、動物撮影回数

設置期間	設置日数	稼働日数	稼働率	撮影枚数	動物撮影 枚数	動物 撮影率	RAI計
20240825-20241124	93	93	100%	2	0	0%	_
20240825-20241124	93	93	100%	8	0	0%	_
20240825-20241124	93	93	100%	54	26	48%	31.18
20240825-20241124	93	93	100%	74	32	43%	35.48
20240825 - 20241124	93	93	100%	909	4	0%	4.30
20240825-20241124	93	93	100%	739	0	0%	_
20240825-20241124	93	93	100%	1129	28	2%	29.03
$20240825\!-\!20241124$	93	93	100%	213	26	12%	22.58



■シカ 図カモシカ ②イノシシ ロクマ 目キツネ ロタヌキ ロアナグマ □ハクビシン ⑤テン 圏イタチ ②ウサギ 図リス 目ネズミ ③モモンガ ロサル

図1 藤原地区におけるカメラトラップ法による哺乳類の撮影頻度の変化

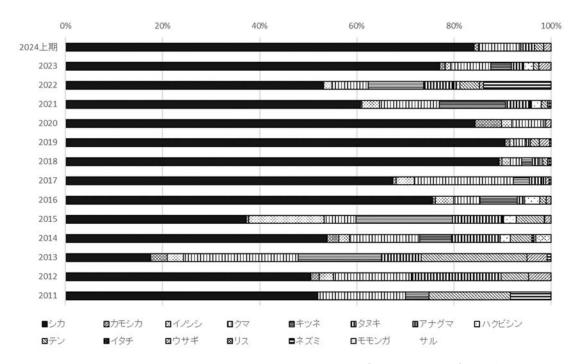
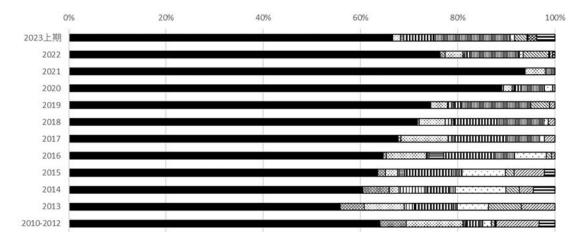


図2 玉原地区におけるカメラトラップ法による哺乳類の撮影頻度の変化



■シカ 図カモシカ 図イノシシ 回クマ 目キツネ 回タヌキ 回アナグマ 図ハクビシン 図テン 園イタチ 図ウサギ 図りス 目ネズミ ロモモンガ ロサル

図3 稲含山におけるカメラトラップ法による哺乳類の撮影頻度の変化

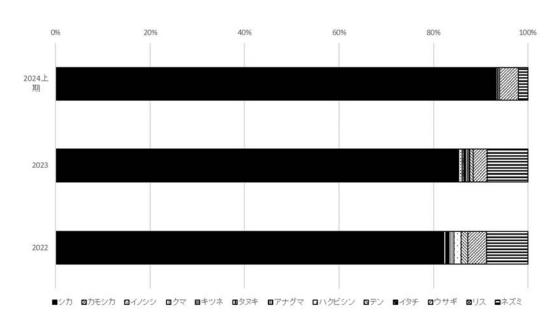


図4 みかぼ森林公園におけるカメラトラップ法による哺乳類の撮影頻度の変化

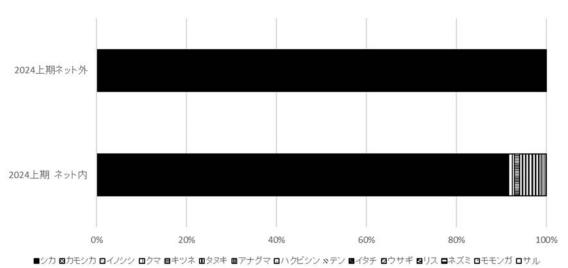


図5 赤城山覚満淵周辺におけるカメラトラップ法による哺乳類の撮影頻度

5 考察

2011年度、2012年度に調査対象地域を選択した前提として、すでにシカの生息密度が高い地域、シカが侵入しつつある地域、シカが侵入しはじめた地域を選択し、継続的なモニタリングを行うことでその変化を把握することを目的とした。2024年度からは、シカ侵入防止対策が行われている地点を追加した。

シカの撮影頻度に注目すると、みかぼ森林公園の撮影頻度は高く、稲含山も増加傾向となった。 玉原高原でもシカ撮影頻度の増加傾向は継続しており、藤原地区は増減を繰り返しながらも全体的 には増加傾向にあることが確認された。赤城山覚満淵周辺におけるシカ撮影頻度も高く、保護ネッ ト内での撮影頻度も高いことが確認された。

カメラトラップ法は、撮影頻度による相対値の比較を行うことで傾向をつかむ手法であるため、 継続して行いながら動向を注視していくことが必要である。撮影頻度もカメラトラップ設置地点の 状況によって相違があることから、調査地点を増加する等、対応をとる必要がある。

6 保護の現状

シカの摂食による植生の変化に対する対策は、玉原地域において2018年度よりネット張り等による玉原湿原の植生保護の取り組み等が行われていたが、現在は、森林内の植生保護柵設置に変更となっている。稲含山は、植林木の圃場において保護材等の試験研究が行われているが、植生全体の保全は行われていない。稲含山の調査地南側の斜面はリターの減少と、斜面の崩落が進んでいる。藤原地域もスギ、ヒノキ等に対するクマの樹皮剥ぎ対策のための樹幹巻きが一部の区画で行われているのみで、シカ対策は行われていない。調査地域においては、2022年度からササの背丈が短くなる傾向が認められ、生育もまばらになってきている。みかぼ森林公園においてもササの矮小化が進み、その範囲も拡大し、低標高地域においてもシカの摂食の影響が確認されるようになった。赤城山覚満淵周辺は保護ネットが設置されているが、シカの侵入が確認された。

引用文献

古澤仁美(2015) ニホンジカが森林土壌に及ぼす影響. 水利科学, 341:78-96. 水利科学研究所. 幸田良介・虎谷卓哉・辻野智之(2014) ニホンジカによる森林下層植生衰退度の広域分布状況.

大阪府立環境農林水産総合研究所研究報告, 1:15-19. 大阪府立環境農林水産総合研究所. 島田博匡 (2010) カメラトラップ法で確認された三重県林業研究所実習林における中大型哺乳類相. 三重県林業研究報告, 2:43-49. 三重県林業研究所.

(姉崎 智子、濱島 啓徳)